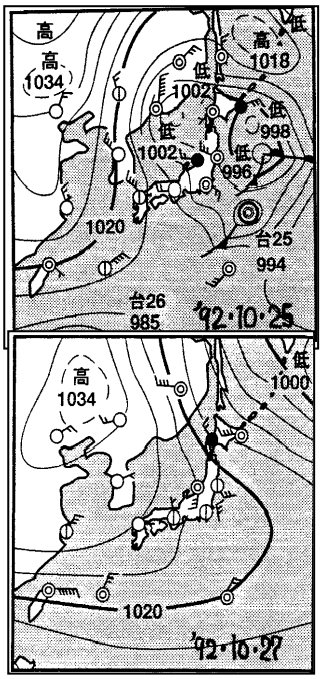
からだとは・病とは(9) 天気図的病気観　鈴木斉観（せいかん）（斉観堂鍼灸・気功治療院院長）

今年ほど異常気象を感じたことはなかった。梅雨が短く、猛暑が続いた。台風はいつもとは進路を異にしてやたらと日本に上陸した。秋の長雨はやっと終ったように見えるが、長く続いていた。

私の治療院のパンフレットには天気図が載せてある。低気圧や前線が日本付近にある悪天候の図と、等圧線の間隔が広くて穏やかな天候の図である。私のからだの見方、からだをイメージする仕方が天気図に近いからだ。

多くの人は、頭痛がすると頭だけを気にし、呼吸が苦しいと肺だけの問題にする。からだの他の部分との関連については余り考えようとしない。ところが、浜松で雨が降っていることについては、浜松だけの問題ではなく、日本付近の天気図に描かれる広い範囲での気圧配置が関係していることを自然に受け入れている。それは毎日のように、天気予報の解説で「気圧の谷」であるとか「秋雨前線がシベリアの高気圧の勢力が弱い為に、まだ日本付近に停滞して」などと解説してくれているからである。しかもエルニーニョ等でよく知られているように、遠く離れた海水温が日本の気象に影響することも多くの人が知っている。



からだや病気についてもそういう風に見るのが東洋医学である。日本の天気が個人のからだの健康状態であるとすれば、地球全体の気象は個人を取り巻く社会や自然の状況である。喘息の人は台風が南の海上に生まれただけで、からだに変化を感じるという。

等圧線がその状態を表しているエネルギーの場に、その天気図の地域が包まれている。逆に気圧配置はその地域の地形などに影響され変化している。相互に影響し合っている関係にあるわけである。からだにおいては、'気'というエネルギーの場が肉体を包んでいて、天気図における気圧と地形のような関係にある。

高山があったり、広い湖があったりすることで、気圧は大きく変化する。通常、目にする日本付近の天気図ではそうしたものが表現されないが、日本海側に雪が多かったり、フェーン現象で気温が高くなるのはその為である。

からだでも、食事をして胃腸が働いたり、事務仕事で頭を使ったり、肉体労働で手足を使ったりすれば、'気'の場は変化する。そうした作業が一時的なものであれば、作業が終れば、再び元の状態になる。ところが胃内停水（水毒）や宿便（便毒）、血毒があるような状態になると、'気'の場は健康な状態とは違うように慢性的になってしまうわけである。

患者さんで「体が嵐で」と表現する人がいる。まさにそういう人のからだは悪天候の天気図のようである。頭を触ると、熱い部分があって、下から上ってきている'気'が手にモワンモワンと感じ、パラパラと当たるものがある。足は冷たくなっている。足には高気圧があり、頭にある低気圧に向けて風が吹いているようである。風の強さはその寒と熱の差によってくる。つまり天気図ならば気圧の差ということになる。お腹は全体に硬いが特に下腹はつっぱりが強い。下腹には血毒があるからだ。そこから発せられる邪気（病的な'気'）が風に乗って上ぼり、頭から出る。 手に当たる'気'がパラパラと感じるのはその為である。邪気はもちろん頭に至る途中でも、もともと流れが悪い部分に溜まり、そこを病ませている。

気圧配置が示された天気図によって、毎日のように天気の解説がされるように、'気'の場の状態による病気の解説が当たり前になれば、西洋医学的な病気観とは違う東洋医学的な病気観が常識になってくるだろう。天気について全体的に見ることができるのに、病気についてはどうして部分的な見方になってしまうのだろうか。

今年は浜松に向かって来ていた台風も多かった。22号の時は今度は浜松直撃かと思われたが、東へそれた。今年だけに限らず、浜松には台風が来ない。これは偶然ではないだろう。私は浜名湖の存在が大きいのではないかと思っている。天気解説でそういう話題が出ないのが不思議である。

（2004年10月寒露）